

「地理「屋」は、フィールドで何をみているか？」

What's “Field-work” ?, as a Geo - “Grapher”

宮本 真二

(滋賀県立琵琶湖博物館 研究部 環境史研究領域)

Shinji MIYAMOTO Dr. Sci.

E-mail: miyamoto@lbm.go.jp

Phone: +81-77-568-4811 Fax: +81-77-568-4850

Lab. of Geology, Cultural History and Geoscience Research Group,

Science Research Department, Lake Biwa Museum

Oroshimo-cho 1091, Kusatsu, Shiga 525-0001, JAPAN

===== 構成 =====

1. はじめに：方法論なき地理学のジレンマ
2. 方本論なき地理学が、「得意」とすること
3. おわりに：共同研究の円滑な運営から「融合」へ

=====

1. はじめに：方法論なき地理学のジレンマ

どのように考えても、地理学独自の方法論はなく（宮本，2004），地理学本来の「**自然と人間との関わりあいの研究**」（以下，関係性研究）（安田，1980）を標榜する場合，隣接もしくは，まったく異なる領域からの「刺激」がないと，この領域は成立もしくは，維持されない。

簡単に研究史をたどれば，戦後地理学にとって，もっとも大きな衝撃は，「環境決定論」のドグマ（安田，1990）だろう。つまり，上記の関係性研究を行う上で，このドグマは，決定的な地理学の衰退をもたらしたと，今，では評価できよう（宮本，2011）。

言い換えれば，地理学がもつ，広範な対象領域を，「科学を志向した地理学」を志向する，戦後地理学の流れは，地理学の「**うまみのあるテーマ・課題**」を自ら放棄したとも表現できるかもしれない。

しかしながら，地理学が本来的にもつ，記載重視もしくは，事実確認的志向は，今の，総合化もしくは，融合のトレンド・流れにおいては，「土台」となる役割をもたらすと，考える。

以下での，著者の経験（自分に置き換えて）をもとに，地理学の役割について，検討したい。

2. 方本論なき地理学が，「得意」とすること

共同研究において，重要なキーワードとなるようなタームを，ランダム表現すると，以下のようなワードが挙げられよう。

2-1 【得意なテーマ】

- ・ 開発史→史料に限定されない歴史叙述
- ・ 土地利用実態・もしくは，変遷→時代に限定されない歴史叙述
- ・ 環境利用史・誌→モノグラフ研究



- ・ 事実確認型研究

2-2 【欠点】

- ・ 問いが、薄い.
- ・ 仮説の設定が弱い. →地域が変われば現象は変化し、その変化や相違の意味を説明できる方法論がない.
- ・ 他分野の流行の、後追い研究が中心→一時期の構造主義やカルチュラル. スタディー研究などなど、数え切れない. マルクス主義・・・???



その結果として、人間が見えない「自然地理学 (Physical Geography)」研究や、自然が感じられない「人文地理学 (Human Geography)」研究で、結果として、「地域の実態」が見えない地域研究の流行?. 地域の切り貼り研究?→地理教育の崩壊もしくは、混乱??



そこで、地域を記述するツールとしての「地誌 (Topography)」の再評価がなされるつあるが、その科学としての地理学の教育を受けた世代にとって (細分化された地理学), 誌 (モノグラフ) する力は、ない. のが現実だろう.

2-3 【フィールドで何をみているのか?】

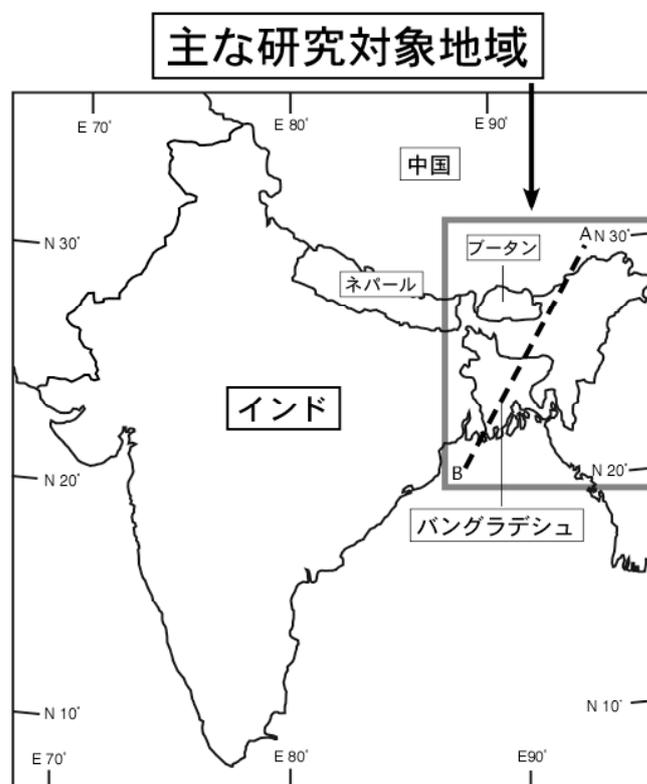
- ・ 地図が無性に恋しくなる.
 - 空間のなかでの地域を意識.
 - 地図で想像 (読図) し、フィールドの現実と照合させる.
- ・ 通訳?・コーディネート (牧田, 1999?) から【融合】?
 - 自然・人文・社会科学に対して一定の興味があるので (雑学的知識: 自虐的表現), 多用な領域の「作法」や「方法論」を【つなぐこと】=コーディネート (宮本, 2010) できる (かも?) (と思う).



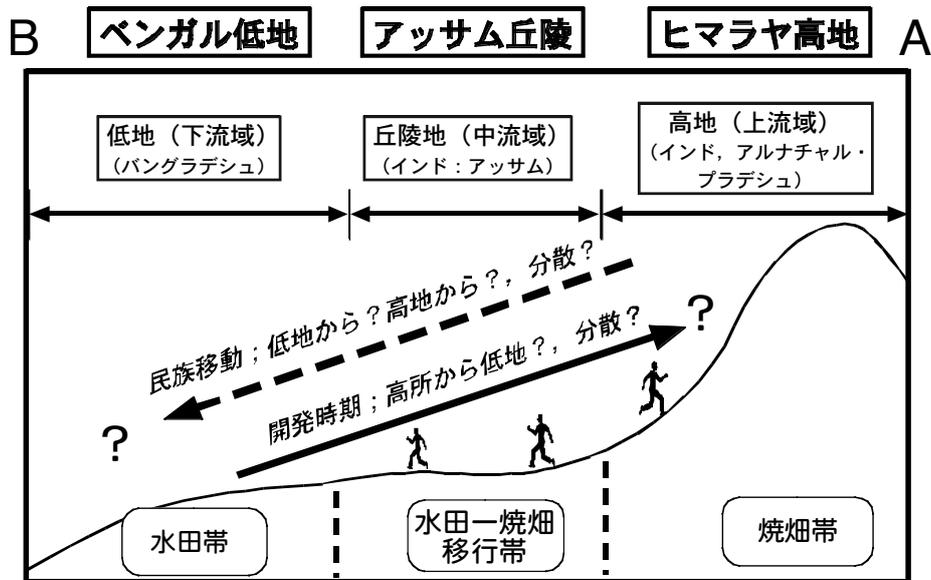
それが、結果として「魅力ある、地理学」「人の顔がみえる地域研究」になるのだろうか?

2-4 【事例の提示】

- ・ ブラマプトラ河流域（アジア・モンスーン地域）の民族移動と土地開発史の「再評価」（以下の図は、宮本ほか（2009a・b）より）.
- ・ アフリカ・ネタは、Miyamoto（2010）を参照.

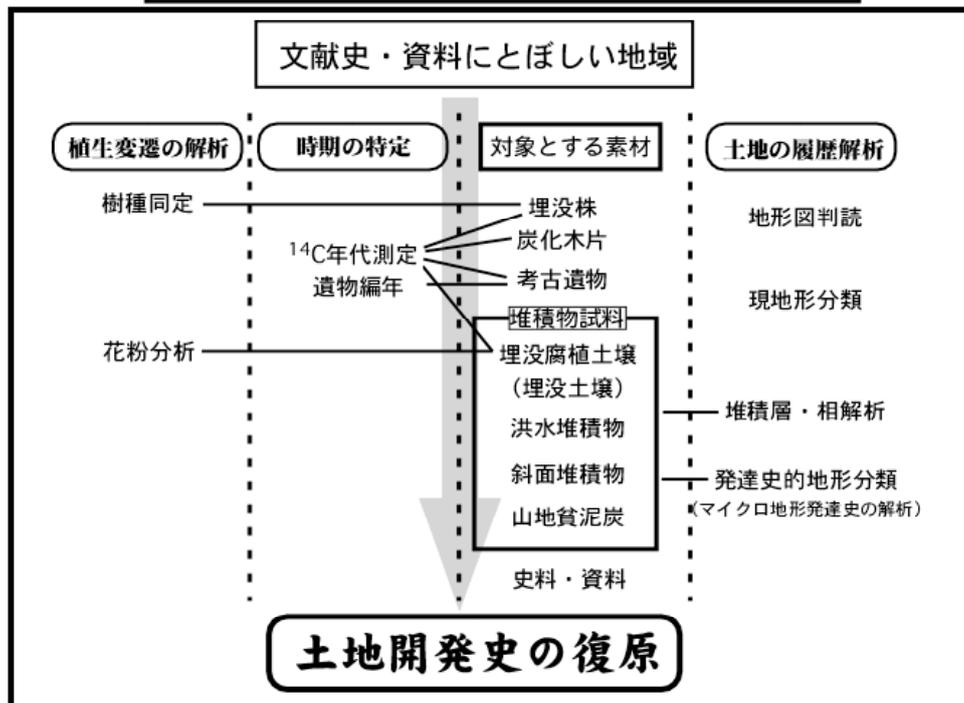


ブラマプトラ川流域南北断面模式図



※断面図の範囲は2p図参照

間接的な歴史「叙述」の方法



3. おわりに：共同研究の円滑な運営から「融合」へ

・「素朴な疑問（多領域から提出される）こそが、共同研究の運営してゆく、重要なキー・ワード。

（案外、しょうもないことで、立ち止まっている可能性がある）。

・互いに、「敢えて」干渉しあう。

・フィールドを一定期間共にして、「同じ釜の飯」を共有すること。

・「キーワード」を、共同研究の途中（フィールド調査の途中で）で出し合う。

・地域という空間で、強引のまとめる役割としての地理(学)もしくは地誌(学)。

・「人間・ヒトにとって・・・」で置き換える地域共同研究。

・異分野からの指摘・批判を「たのしむ」精神と余裕、と譲歩。

（とくに、医学関係の定式化された、データ依存主義的（データ搾取主義？）研究は、よろしくない。）



【現段階での結論】

①「地域に根ざして、その多様な領域から見えてきた「事実」をもとに、地域を「読み替える」「見方が変わる」のが、共同研究の醍醐味である。



②もちろん、プロとしての専門性は、大事で、個々の領域での Findings は個々の領域の専門の場で公表すべきだが、全体・総体としての「発見」こそが、共同

研究の醍醐味であること的前提を共有できれば、その、共同研究は成功したと言えるのだろう。



③なぜなら、その（刺激をうけた）経験は、次の共同研究に「つながって」ゆくものだ。

【付記】

- ・ 岩田地誌論文（下記）が、他分野にとって、とても、参考になるだろう。
岩田修二（2004）東京都立大学地理学科における「地誌学概説」の授業内容。
地誌研年報（広島大学），13，119-134.
- ・ 太宰 治『津軽』は、「私で、語る「地誌」だろう。

【参考文献】

- 宮本真二（1995）私のフィールドノート（19）－海外調査の醍醐味とは？．
立命館大学地理学教室同巧会だより，43，6-7.
- 宮本真二（1997）博物館における自然地理学の役割．立命館地理学，9，77-81.
- 宮本真二（1999）：私の考える地理学．地理，44（11），46-47.
- 宮本真二（2004）フィールドからの環境史－地理学からの応答－．日下雅義編
『地形環境と歴史景観－自然と人間との地理学－』，古今書院，7-21.
- 中島経夫・宮本真二（2000）：自然の歴史からみた低湿地における生業複合の
変遷－学際研究から総合研究への可能性－．松井 章・牧野久美 [編]『古代
湖の考古学』．クバプロ，東京．169-194.
- 宮本真二・牧野厚史（2002）琵琶湖の水位・汀線変動と人間活動－過去と現在
をつなぐ視点－．地球環境，7，17-36.
- 宮本真二（2008）ヒマラヤ地域，高所山岳地域の自然災害問題．ヒマラヤ学誌，
9，49-53.
- 宮本真二・安藤和雄・アバニィ・クマール・バガバティ（2009a）ヒマラヤ地
域における民族移動と土地開発過程．ヒマラヤ学誌，10，ヒマラヤ研究会，
京都，64-72.
- 宮本 真二・内田 晴夫・安藤 和雄・ムハマッド・セリム（2009b）洪水の

環境史—バングラデシュ中央部，ジャムナ川中流域における地形環境変遷と屋敷地の形成過程—。京都歴史災害研究，京都歴史災害研究会，京都，10，27-34.

宮本 真二 (2010) 博物館と地理学. 地理, 55 (10), 12–19.

Shinji MIYAMOTO (2010) Late Pleistocene Sedimentary Environment of the “Homeb Silts” Deposit, along the middle Kuiseb River in the Namib Desert, Namibia. African Study Monograph Supplementary Issue, 40, 51–66.

宮本真二・内田晴夫・安藤和雄・セリム ムハマッド (2010) : ベンガル・デルタの微地形発達と土地開発史の対応関係の解明. 地学雑誌, 119 (5), 852-859.

【ご参考まで】(文化地理学の方，怒らないでください).

野中健一 (立教大・提供)

還元科学研究会 2011. 1. 10

松本先生 (元奈良女子大学・文化地理学) 要点

- ・ 文化の中の飼い慣らされた「自然」だけにとどまるのではなく、「他者」としての自然という対等な存在という自覚
 - ・ 文化としての「自然」は人の好意において生成し、また人も生成する
 - ・ 生きられる環境は流動性をもち意識化され、言葉化されたものは制御を働かせた表層的なものの (その意味論的・語彙的な理解だけでは不十分)
- われわれが詩的世界 (間隔経験の融合や横断) と呼ぶものを、われわれの身体や頭脳は生きている

1. フィールドワークとは

- 1) 調査地への入場から調査・資料収集・分析・解釈に至るまで状況依存的な主観性に基づく営みという自覚→フィールド：インフォーマントとの相互交渉による間主観的な解釈の構築過程
- 2) ローカルな文化をグローバルな政治経済過程から切り離してはいけない→ローカルな文化の内部は複合的かつ多様であり、また、グローバルは外部ではなく、まさにローカルの中にあり、他のローカルと相互作用によって構成し、構成されている (D. マッシーの

Progressive approach)

- 3) フィールドワークの成果は部分的なものであり、研究者の状況依存的な解釈可能性の限界を持つ

2. 文化人類学の問題点

- 1) 地理学の後を追って、比較一般化の困難性と文化的な差異という前提
- 2) 文化の内にとどまっている→文化（イデオロギー）至上主義（研究者の間で文化が客体化（抽象化）され、他のアスペクトの関連性への目配りが希薄）
（物事によっては「語り」がインフォーマントの解釈であるのに、それを総意的事実として解釈）（政治的アイデンティティやエスニシティの観念的な均質化・純粋化（作業仮説が本質主義）→流動性への糸口がつかめない
- 3) 文化相対主義ないし文化的差異という前提
われわれ/彼ら（彼女ら）という他者の想定（絶対化）

3. 観察から行為空間への寄与 —生活世界における経験の共有へ—

知

科学 (Scientific) 知

知性による理性的・中立的・体系的な恣意世界

傍観者的 (detached) 視覚世界からの説明

民俗的 (folkloristic) 知

情動・感情・価値判断をともなつた流動的・主観的・半意識的世界

身体性をともなう行為的世界→このレベルの経験の共有

* 異文化として傍観者的・観念的に差異を強調するのではなく、よそ事・他人事ではないという自覚

4. 方法論の反省

- ・すでに人が関わる以前から外部世界として分節化された自然環境が存在し、人がそれらを知性によって分類して認識し、言語化して組み立て、それを媒介として自然に対応しているという傍観者的な立場よりも
- ・人と自然は元来一体であって、その視点から「自然環境」がどのように生成するのか、また逆に人が生成するのか、その現象の立ち現れる現場を行為空間において立ち会う

文化生態学的モデル 場をベースとするが静態的 動き（外部性・ローカルな多様性）を付加

することが必要

見える世界＝「景観」は大事

しかし「景観」傍観的にしてはいけない

→人と自然は本来一体 体得された行為的自然・行為空間において立ち会う

自然と一体化→自然の中に位置する

環境認識 人間化された自然 環境に対し技術的に対応し、社会的に自己調整し、イデオロギ

ーと宗教によって方向付け